実務家教員からみた教員養成教育への提言

岡村　吉永・霜川　正幸・静屋　智・松本　清治・藤上　真弓

Practitioners' Views on Pre-service Teacher Education

OKAMURA Yoshihisa, SHIMOKAWA Masayuki, SIZUYA Satoru, MATSUMOTO Seiji, FUJIKAMI Mayumi
（Received January 7, 2015）

キーワード：教員養成教育、実務家教員、提言、小学校教育コース

はじめに

教員養成・免許制度のあり方に関する中教審答申（中央教育審議会，2006）で教職大学院の創設が示され、その中では、実務家教員（文部科学省HP）の果たす役割が重要となっている。山口大学教育学部では、平成21年度の小学校教育コース設置以来、学部の教員養成教育においても実務家教員が積極的に学部教育に参画し、その効果を上げてきた。こうした状況を踏まえ、今回、今後の教員養成教育に関する資料とするため、現在教育学部に在籍する実務家教員に対する座談会形式の聞き取りを実施した。

１．教員養成教育への提言

座談会は、2014年12月24日に実施した。以下の記録では、司会を「司」、参加した実務家を「Ａ～Ｄ」で略記する。

１－１　小学校教育コースの印象

司：では早速ですが、みなさんに小学校教育コースの印象について伺います。

Ａ：私は、昨年度まで現場におり、担任をしていたので思うんですが、こんな若者ばっかりだったら職場が盛り上がるだろうなと感じました。小学校教育コースの卒業生たちと職場で働けていないのが残念です。こんな若者がいると、先輩教員たちも刺激を受けて頑張ることができるような気がします。集団としてはすごいエネルギーがあるので、一番私が求めたいなと思うのは、いろんな所に飛び散っていった時に、今まで勉強してきたことを背景に、一人でも頑張れるようになって欲しいということです。

Ｂ：そうですね、他の研究室と比べて見るというのはなかなかできないですが、チームワークっていうのは非常にいいなと思います。で、個性がいろいろあって、将来性があるというか、可能性が沢山あるなと感じます。まあ、これは先生方もチームワークがいいし、まとまっているっていう感じがしますよね。

Ｃ：まず、学生全般的に表現力というか、コミュニケーション力が備わっている。はっきりと自分の想いを表現でき、それから自分の目標はこうですよとか、自分はこういう風なことをしてみたいと思いをちゃんと表現できる。これは、ＡＯ入試を行っているのも一つの要因かなと思います。

　それから、学年単位でしっかりとまとまりがある。２年生全体でとか３年生全体でとかいう意識が非常に強くて、まとまりのある学年運営をしようという学生が多いということですね。

Ｄ：まず一つは、入りの魅力で、モチベーションの高い子が入って来ていると思います。面接とかプレゼンテーション含め、その子の教員になりたいという意欲や熱意を汲み取る入試をすることで、魅力的な良い子が沢山入ってきてる感じはします。二番目は、結局入りの学力ではないということ。（入学時点でみると、小学校教育コースの学生の）学力は高いとは言えないように思うが、それでも最終的に採用試験に80％以上の率で合格している。小学校全科であれ教職教養であれ、都道府県教委が資質があると認

める点をクリアしているということです。モチベーションが伸びしろにつながるという点で、非常に良い集団なんだろうと感じます。三番目は、30人位というのがいいと思います。6人とか10人という小人数も良いけれど、極小規模校の職員室みたいな雰囲気で、集団として成り立ちにくい。30人位いると、年によって5つ位のグループに分かれたりしますけど、それはそれでまたいい集団づくりの勉強ができる。

それから、教員間の活力。これはチームの力なんですけど、学生のためならというリーダーがいて、周りがそれをやらざる負えない雰囲気がある。やるしかねえなと。でも、それは絶対大切だと思っていて、ある大学の知り合いが採用試験にきちんと通る教室とそうでないところの違いを調べたところ、結局沢山合格する教室というのは、先生と学生の距離が近くて、双方向の教え合いがあると結論付けていました。小学校教育コースは、現場関係の人が多いし、研究者の先生もそれを上手く使っていただいている。教員バランスもとれてるし、熱いんだろうなあと感じます。

一方、課題としては学力。初めに入りの学力だけではないと言ったものの、やはり学力が必要と思ったことは何回もあります。そしてもう一つ。やはり小さい時から学校の先生になりたいと思う子、あるいは先生が「あなたは先生になったらいいよ」とかいう子は、ある程度勉強ができて真面目な良い子が多い気がします。それは良いことだけど、スケール的にはやや物足りない。厳しい局面に直面したときにどれ位の反発力があるのか、やや不安な部分もあります。その辺をカリキュラムの中でどう鍛えていくのか、地域教育実践演習なんかで、できるだけ外の大人と関わり、揉んでもらおうと思っています。

１－２　小学校教育コースの成果について

司：つぎに伺おうと思っていたことをかなり言っていただいているのですが、小学校教育コースが成果を上げている点、あるいはこれからさらに強化していくべき点を教えください。

Ａ：Ｄ先生が言われたことですが、成果を上げているのは、やっぱりリーダーのポリシーがあって、皆がついていかざるをえない状況にある。教員にチームワークがあり、察して動ける人ばかりだと。それを見て学生たちも育つんだろうなって思います。学校現場にいると察して動くということが求められますが、なかなかそうもいきません。経験年数の少ない同僚に必要な情報を伝えても、一緒に活動する場合に、イメージを共有できていないということも多々あり、先輩教員として落ち込むこともありました。小学校教育コースの学生は、先生たちがチームとして働く姿を見て学ぶことも多いだろうなと思いました。2つ目は研究者教員と実務家教員のバランスがとても良い。学生は、いろんな先生の経験を基にした話が聞けるので、偏りがなくて良いと思います。3つ目はカリキュラム。小学校教育コースは、自分たちが考えないと進まない授業があるし、いろんな行事も仕組まれています。なかなか自分で考えて動くことができない若者が多いと感じる中、すごくいい経験をしていると思います。その経験をもとに、小学校教育コースというグループだからできるのではなく、他の人と組んでも上手に音頭が取れるようになってくれるといいなと思います。ほかのコースと組んでやれるようなことがあってもいいのかなとは思います。

Ｂ：カリキュラム構成に柱がちゃんとあり、演習に意味を持たせている。省察というか、そのレベルについての要求度が高いということはあるかもしれません。それはやはり座学ではなく、われわれ実務家が現場の視点で要求しているという所もある気がします。逆に言えば、そういう点をもっと意識的に1年の時から言えるようにしたい。段階的なレベルというのは、今後我々が意見を出し合って考えていかなくちゃいけない部分もあります。

Ｃ：同じようなことになると思うんですが、学生がモチベーションを保ち続けられるようなカリキュラム構成、例えば教員になりたい、小学校の教員になりたいという思いを1年次から4年次まで保ち続けられるカリキュラムになっていること。先生になる意味を、授業や行事の中で感じ、自分たちはこういう風に育てられているんだという気持ちを持ち続けられる。だから、４年生になるまで教員になることを諦めない子が多いんじゃないかなと。学生が自信を持って先生になるという運営が成果というか特色だと思います。逆に不十分な点として、小学校教育コースで学んできたこと以外にもいろんな世界があるんだという見方、視点をもって教員になって欲しいと思いますし、そういう視点が持てる状況も作ってあげたいと思います。現場には様々な教員や意見があるので、柔軟に考え、現場に打ち解けることが求められます。あと、漢字の読み書きとか、筆順とか、板書の仕方とか、もう少し細かい技術や知識を与えら

れる機会があったらいいと思います。

D：実務家教員と研究者教員の協働が非常に上手くいっているというのがあると思います。実務家の役割と研究者の役割って違うと思うんですよね。授業の中で、実務家は、現場の経験に基づいていろんなことを言い、実践を紹介しますが、研究者はそれを聞いて、今の話はこうこう、こういう事でと整理し、次に理論をどっかーんと載せてくる。それは教育に絶対必要になるもので、小学校教育コースには実務家と研究者が協働で実施する授業が多く、上手くいっている。それから学生にいろいろ（実践を）ガンガンやらせるが、やらせた後にきちんと省察をさせる。そのうえで、必ず評価の場を持つじゃないですか。その評価が例えば発表という形であったり、あるいは自分らでまとめて何かを残させるであったり。考えたら小学校教育コースは、授業だけでなくそのパターン多いですよね。ただやりっぱなしではなくて、自分らなりにきちんと評価をさせる、それを貫いている所が成果を上げている要因だろうなと思います。

それから、カリキュラムはＢ先生が言われたけど、やっぱり三つの系がおそらく今求められている小学校教員としての資質や能力にきちんと当てはまっちゃってるんだろうなという感じはします。だから子ども理解にしても学習指導にしても協働実践にしても、一つの系しかやらないというのではなく、四年間全体を通して全ての系に入り浸って欲しいなと思います。そういうカリキュラムの系立てが、時期にかなったものなんだろと思います。

不十分な点は、あまりないんですが、先生と学生の距離が近すぎて、先生を先生と思ってない学生がいるようです。研究室に飛び込んできて、勝手にどんどん頼んでいくみたいな。ちょっと待てよ、ちゃんと学生と教員の別を分かってるのかと言いたくなることはあります。その辺の社会性をどこで指導するのか、そのまま教育学部の課題につながっていくように思いますけど。

１－３　小学校教育コース並びに教育学部の課題と改善

司：小学校教育コースは、いくつかの使命を帯びて設置されましたが、その一つに学部教育のあり方を考えるパイロットとしての役割がありました。小学校教育コースのノウハウや課題を全て開示していくので、それを基に教育学部の改善を図ってくださいというものです。その視点から、小学校教育コース並びに学部の教育について、考えをお聞かせください。学部の改組に絡んで全体が変わっていく時期でもあるので、そこで課題やあるべき姿についてもご意見をお願いします。

C：教員養成ということが教育活動の主目標としてあります。では、教員養成の段階において、教員になるためにどのような力を付けていくべきなのか、これを学部全体で共有できているのか、という所は課題だと思います。小学校教育コースでは、教員としてこういう資質を身につけさせたい、こういう力が必要だよねということがあって、実際にカリキュラムが組まれていますが、それが学部全体でも明確に理解され、統一されると良いと思います。教科の力もいるよね、生徒指導の力もいるよね、こういう力をいつどうやって身に付ければいいのか、一つの指針を立てて学生指導をして行くといいんじゃないでしょうか。

A：教育法の授業を持っていますが、教員としてこうあってほしい、だからこの授業をしているんだということについて共有する場を設けても、なかなか分かってもらえない学生がいることがあります。何のためにこの学習しているかがなかなか理解できないというか、つないで考える力が弱いと思います。この授業を自分が担当するとしたらとか、自分の専門の教科だったらというように、自分に関係のあることとしてイメージができないと感じます。例えば指導案の書き方ですが、一つの型、例えば附属光小を取り上げると、それ光小バージョンだろ、山小で習った者には（関係ない）…、って感じで形式ばかりにこだわるんですよね。「つなぐ」ができないのです。２つの附属小学校の指導案に限らず、多様な指導案の形式も紹介しているのですが、少し形が変わると書き方が分からない…となってしまう学生も多いです。形式ばかりにこだわらず、そこに込められた教育観も伝え、こういう形式になっている意味を考える場もつくっていますですが、なかなか観が汲み取れない。表面ばかりに目が向くことが多いですね。これは小学校教育コースにも言えることですが、小手先の授業技術を欲しがるというか、授業技術を足し算していけば上手い授業、良い授業ができると思っているようです。型から入ることも大切ですが、型ばかりにとらわれていると、教育実習前に不安になって「どうしたらいいんですか？」と先生方に押しかけないといけなくなってくる。不安ばかりに気を取られ、自分の考えも持たずに相談に来る学生もいます。教師として自分はこうありたい、講義や勉強して得たこの方法を使って、こう指導したい

んだけど先生どう？っていうのなら相談に乗りやすいのですが、丸ごと教えてもらいたいというのは、ちょっと頼り過ぎかなと。これは現場の若い教員の中にもみられる場合もありますが。経験が少ない分、こちらのフォローも必要だと思います。しかし、何らかの自分の意志をもってほしいですね。

D：授業なんかでも、自分だったらどうするかという所と結び付けて学べてないというのがあると思います。それをどうやって学生時代のうちにできるようにするか、教員養成学部全体の課題ですね。教員としての緊張感がないって言うだけじゃダメですよね、まだ働いてないんだから。

A：私は具体的な授業場面に降ろして、じゃあ自分ならどうするかを考えさせるようにはしているのですが。教師の表面的な所でなく、見えないところを考えさせたい、ですかね。

B：A先生がいう具体的なものというのは、映像とかですか？

A：映像もだし、子どもの書いたプリントや表現物などです。私は、ちょっと機器に弱いので映像でなく写真なのですが。具体物、例えば教室の環境なんかをできるだけイメージさせる。黒板になぜ私はこう書いたのでしょうなど。大学の授業なのですが、学校現場の実際の要素を織り交ぜながら授業をしています。

B：4年生の教職実践演習。採用試験が終わった段階の教員志望者を含め、全員にやったんですが、言葉は知ってるけど中身が分かってない。2年や3年の時にやる教科教育法とか初等科なんとかというところで、どれだけの学びができているのでしょうか。その具体性がないと、3年の教育実習に結びつかないと思います。なんとなく教育実習が卒業までの通過地点みたいな感じで、それはちょっとまずい。基本実習までにもっと具体的なレベルに追い込まなくてはという気がします。これは、学部にも小学校教育コースにもいえると思います。

　例えば、小学校教育コースのコンセプトってあるじゃないですか。それに基づいて1年、2年、3年そして4年で何を身に付けるのか、その図柄、構造的な人材育成の図柄というものをやっぱり学生が知るべきだと思います。小学生に対しても同じことを思うんですが「目指しているものは何で、だからこうするんだ」という意味、そこに求められる思考判断というものを学ぶ側にも位置づけておかないと自己評価も何もなくなっちゃう。そういった面で、きちんとメタ認知を繰り返していける学生を作っていく。でないと、自分が教員になった時に、子どもたちに対してそういうことを伝えていけないと思うんです。大きなお題目はあるけれど、それを各教室で、あるいは一つの授業の中で、何のためにという所をもう少し丁寧に学生に示していくこと、そして具体的に要求されるものに対して自分自身が、先生も評価するんですけど、評価指標を持ち、その満足度や達成度を学生がある程度意識できるシステムを作っていくことが必要です。4年の採用試験にもつながることだとも思っています。

A：教職実践演習の振り返りカードに、我々実務家教員の話を早く聞きたかったと書いてありましたし、直接伝えてきた学生もいました。こういう具体的で、実践的な内容を早く知りたかったと書いてあったので、私はちょっとショックを受けました。実習も経験し、現場に出る直前だからこそ身にしみて分かるというのもありますが、もっと早い段階でも行う必要もあるのかなと感じました。

B：初等科〇〇とか〇〇教育法とかいう教科教育法に関わる人たちが集まって、どういうことをやっているのかを交換し合ったりして、コンセプトを作らないとだめだと思っています。それから、やっぱり山口県にある大学なんだから、山口県の現状や今現場で起きていることを反映しないといけない。学校現場と乖離してしまっては意味がないと思うんです。

D：一方で、やればやる程、特に早い段階から現場のことをリアルに伝えたり、実践的な所にどんどん入って行くと、学生はそこまでの準備ができてないので、現場のリアルな現実や難しさ、困難とかを聞いた時に、自分ができるのか、本当に先生になって大丈夫なのかという不安、マイナスな部分が当然出てくるじゃないですか。それは当たり前のことで、それをカバーできるのが実務家なんだろうと思います。現場の先生というのは、こういう情熱や気持ちを持っていて、それ以上に子ども見せる変化や成長がたまらなく嬉しんだという教職の魅力や喜び、それをリアルに語れるのは実務家なんだろうと。

　ちょっと違う視点なんですが、カリキュラム詰め過ぎじゃないですか。月曜1コマから金曜5コマまで目一杯、特に3年生なんか、お前いいのかと思うことがあります。小学校教育コースなんか、そうはいってもカリキュラムが限選されてる部分があるんですが、学部全体としてみたら一週間の空コマが少ないですよね。小学校教育コースでは、授業や評価を工夫して単位認定しているものもあって、それで現場にも行かれるし、サークルに参加したりできているんですが、全体としてもそういう工夫がいるの

ではないでしょうか。学校現場とかビジネスの世界は、スクラップ＆ビルト、なんか作ろうと思ったらどこかを整理して新しいものにビルドアップする。大学って割とビルド＆ビルドで、どんどん作っていくから、月から金、下手したら土日までびっちり詰まります。これでは、教員としての抵抗力がつかないと思います。自らやりたいこと、情熱をかけられるものに使える時間を一程度確保できるようにしないと、人間的な魅力が出ないんじゃないかと思うことがあります。だから、カリキュラムは考えていかないと。粗削りだけど十年後に大化けしたという例は少なくありません。そういうスケールのでかさを感じさせる面白そうな学生が少なくなった気がします。特に小・中学校は、先生の魅力に子どもがついてくる部分が大きく、そういうのをどうやって作るんだろう、何とかしてやらないとと思います。

１－４　教育実習に関して

司：カリキュラム全体の意味や構造が、学生にとって理解しやすい明示的なものであること、そのために体系化やスリム化が必要なこと、私もそうあるべきだと思います。では教育実習については、いかがでしょうか。

Ｂ：基本実習で受け止めたことは、それから生かせばいいみたいな感じがあって、基本実習までが座学のようなもので終わっちゃってる。でも3年の後期は授業が少なくて、その中で自分が教育実習で感じた課題をどうやって整理していくのでしょう。学生が抱く子どもや授業のイメージは、彼らが（子どもの頃に）経験してきたものがあるだけで、今求められている授業像っていうのが無い。無いまま基本実習を行っているから、身に付くものもあまりに少ない。見るべきことを全部見落として、教育実習を終わっている感じがします。1、2年生の時から、実際の授業や子どもたちの姿、この教科ではこんな授業スタイルがあるんだよとかいうのをちゃんと視覚的にみせていく必要があると思います。それがないから、いろんな授業、例えば数学的活動ってどういうもんだと4年生に聞いても「は？」となる。指導要領にはこういう活動内容ですよ、こういうものを通して、思考力・判断力・表現力というのを鍛えていこうとしているのが今の姿ですよと示されている。そういうのを1年生の時から視覚と言葉で一緒に植え付けて行かないといけない。座学で学ぶものもあるけれども、そうじゃない部分っていうものもきちんと見て学んで欲しい。それを基に学生たちが討論したり、より良いものって何かを考えて欲しい、基本実習までに自分なりのものを持って欲しいと思います。

Ｄ：確かに、基本実習までにある程度のものがあって、授業ができていくといいよね。でないと、結局実習行っても、行っただけになるよね。

司：指導要領を熟読して、それを記憶しろとまでは思いませんが、そこに書かれている精神、あるいは新しい学力観、いま何が求められているのか、そしてこれから何が求められるのか、実は4年生でも十分理解できてないところがあって、それを補習で彼らに教えているところです。その辺は、小学校教育コースのカリキュラムとしてではなくて、学部のカリキュラムで押さえるべきところなのでしょう。小学校教育コースのカリキュラムが生きるためにも欠かせない点であり、焦りを感じます。

Ｂ：附属との連携で思うのは、個別の授業というか、教科の授業で目指している物を映像で残して欲しいということです。教科教育の先生と連携し、こういう意図で授業を映像化したいということがあれば、学生もそこに行って、授業を見ながらビデオ撮ったりできます。それを持ち帰って重点を押さえるようなことをどの教科もやっていけば、けっこうまとまりのあるものになるといます。それとともに、これは肖像権とかいったものがあるけれども、公立学校、例えば平川小などで生徒指導的なものがあればと思います。支援が必要な子供にどう対応するか、授業で使いたいので状況を撮らせて欲しい、そしてそれを材料に学生と一緒に考え、さらに学校に返して一緒にやっていきましょうというような形でやる。言葉のレベルでなく、映像として情報を共有していくと全然意味が違ってくると思います。肝心なものについては、全ての学生が同じものを見られる環境、感じられる環境があり、それでもって討論したり、考えて行くっていう習慣をきちんと学部自体が持つ必要があると思っています。

Ｃ：今の話に付け加えなんですけど、その映像を見せながら子どもに討論させた後に、先生方がそれに対して、これはこうと説明してほしいです。さらに進めて、その授業を担当する先生に学校で授業をやっていただけるようになればベストなんですけど。

司：現場をよく知っている先生方、それから理論的なことを研究している先生方。これって、それぞれ居るんじゃなくて、教育学部としては一人の人間が両方できることが望ましいと考えます。研究者と言われ

ている人たちは、現場の教員以上に現場が分かるようになって欲しいし、折角交流で来ていただいた先生方には、研究者以上に研究のこと、理論的なものが分るという形になって欲しいと思います。教員以上の研究者、研究者以上の教員というのが私は必要だと思うし、現実にそういう人は沢山いますよね。だからそういう環境づくり、教員自体の意識の変革っていうのが求められるだろうし、それはある意味、教職大学院というものが起爆剤になっていくだろうと思っています。附属学校との共同研究についてはいかがですか。

Ｃ：センターの協働プロジェクトの中で、（先程話題になった）コンテンツを作ったりとかできないでしょうか。教育法担当の先生が附属の先生と一緒になって、こういう力を身に付けるにはこんな授業が良いですよというのを映像にし、授業で見せます。そこで、この授業の意図はこうこうですよって言われたら、いいかなと思うんですけど。せっかく協働研究のプロジェクトがあるんですから。

Ｂ：プロジェクトで研究資金を出していますが、今年はこういった点をやるのでどうかという提案があってもいいと思います。どの教科もどの教室もそれでやるっていうのは抵抗感があるかもしれませんが、ある教科でチームを組んで一緒にやって行こうというのは説得力があると思います。

Ｃ：DVDに起こして、成果ですから授業で使ってくださいって。いいコンテンツができると思います。

Ｂ：そうですよね。視覚的じゃないと、学生には絶対伝わらないと思うんですよ。

Ｃ：実際に子どもが映っている様子をみることで、こどもの動きというのを覚えますからね。

１－５　教員養成の段階で、どのような力をどこまで身に付けておくべきか

司：先程も出ましたが、教員養成において、それぞれの達成目標、達成段階、評価も含めて、何をどこまでできなきゃいけないのか、どこまでやったらＯＫなのか、それを明示したカリキュラム体系に変えていく必要性を感じます。それが一つ。もう一つは、それがカリキュラムといえるかどうか疑問なところはありますが、何をどこまでとかいうのでなく、学生がその時その時に身に付けてきた力で、どれだけ状況をきちんと把握できるかということも大切だと思っています。明示的なプログラムと、プロセスは明示的ではないけれど、最後にその意味や評価が明確にみえるプログラム、その両方をうまく組み合わせる必要があると思います。

　見えないプログラムを見える形に変えていくためにどう工夫をすればいいのか、あるいは明示的なカリキュラムの中でそういった力のベースになるもの、見えないプログラムに適応できるようになるためのヒントを頂けるとありがた思います。

Ｂ：教師として一番…、何ていうか、差がつく部分は、読み取り能力だと思っています。これは評価能力とほぼ一緒だと思うんですが、いま現場の先生方でもその能力を意識している人はあまりいなくて、評価という言葉を聞くと、評定のための総括的な評価っていう意識の人が多いですね。でもこの評価能力がすごく大事で、何を評価すべきなのかを考えて授業が構成できる、教育活動、学校行事も同様で、そのことを通して子どもを成長させる、評価を介して成長させるということがあるからこそ、指導に適切な意思が含まれると思います。何を評価すべきかという視点を明確に持つ、それは何を指導するかと同じになると思うんですが、確実に評価をして次の指導に生かす、これが連動していなければなりません。学生の時から、評価に対する意識というのはきちんと高め、視点を明確に持って読み取ろうとする、コミュニケーションしようとする必要があります。そして、それを記憶したり、記録したりしながら、具体的に示していく、そういったことを重視していく必要があると思っています。

　小学校教育コースでは、実践系の学生たちが現場で見たり聞いたりしたことをまとめている所です。貴重な体験をしてきているんですけれども、初めにそういう視点が沢山あって、毎日そういう視点での振り返りができていれば、記録の蓄積の仕方が変わってくると思います。我々としても、そういった部分をもっと明示していく必要があるなって痛切に思います。

Ａ：私も、今Ｂ先生が言われている見取りがすごく重要だと思っています。生活・総合で一番大事にしている所が見取りです。これは、どの教科等にも必要な手立てです。だけど、学生や現場の先生を見ると子どもの姿から色々なことを汲み取ることの大切さを実感できていないなと感じる場合があります。子どもにどんな力がついたのか、どんな力を活用しているのか、どんな思いや願いが生まれたかなどということを見ようとする方とそうでない方に分かれるなと。私はずっと授業公開する立場だったのですが、私がしている授業形態、発問、板書など、そういう型の部分には目を向けてもらえるのですけど、それ

らに授業者が込めた意図は汲み取ってもらいにくいのだなと感じることがよくありました。公開の仕方にも課題があると感じ、手を変え品を変え、それらの見える化を図ってきましたが、授業を子どもにとって意味や価値のあるものできるようにするためにも、教師の意図を汲み取れるようになって欲しいと思います。そこで、自分の授業でグループモデレーションといって、複数の者で一つのものを見てどう評価できるかという学習を組み入れています。例えば、子どもの書いたプリントから、設定したねらい以上にどんなことが読み取れるかということをやると、1人の教師では、見取れない視点が沢山出てきます。そういうことを研究することで、子どもの見え方が変わって来ると思います。指導と評価の一体化とよく言っていますが、評価即指導だと思っていて、見取りができない人には次の手だてが生み出せないと思います。

もう一つは、B先生がいつも言われる共有です。やっぱり現場はアカウンタビリティー、説明責任が求められます。色んな人と目標を共有できないといけません。人を巻き込む力、クラスの子どもたちだけでなく、多様な世代とチームで動ける、目標を共有できることが大切です。もう一点、授業の中において、その教科等の本質と子どもをつなぐことはとても大切なことですが、子どもと子どもをつなぐための手立てを意識できていないことが多いです。これは現場の先生でもなかなかできないことですが、そのつなぎ方をしっかり勉強してほしいと思います。

C：A先生が言われることもよく分かるんだけど、ただ自分自身がそういう評価の仕方とか、ものの見取り方とかをどこで勉強したかというと、やっぱり教員になって子どもから勉強した、そういう人も多いわけです。じゃあどうやって、子どものいないこの大学の場でそれをどうやって身につければいいのか、うーん、どうしたらいいのかなと。どういうやり方があるのかなと考えた時に、うーん…。

A：先ほどの映像とかもいいと思います。授業の中にそういう具体的な場面を作ってやっていくと良いと思います。私も現場で自分の自力で勉強したけど、大量退職、大量採用の今は即戦力も求められています。だから、大学ですることも変わっていかなくてはいけないのかなというのが実感なのです。

B：小学校教育コースだけじゃなくて、社会科とか理科とか映像がものになる教科ってあるじゃないですか。音楽、家庭科、体育もそう、全てそうかもしれません。だからそういった部分を手始めとして、附属学校と一緒に記録に残す、初めから良いものが残せるわけじゃないけど。そのきっかけを作って、子どもの成長記録、小学校に入学してから六年生まで、その子の表現したものとか成長の全てを映像として残しておきます。その中で、この子はこんな成長をしてきたんだなっていうのが分かれば、先生としての戦略、その子に対する指導の道筋がかなり明確に持てると思うんです。そういう記録、ポートフォリオを学校自体がきちんと残していくことが、これからの時代には必要かなと思います

D：私も先生方がおっしゃったこと、全くその通りだと思います。それにプラスなんですけど、内省力というか省察力という言い方でもいいんですが、自分自身を冷静に俯瞰し見つめる力、冷静に内省する力が必要だと思っています。加えて、今の学生は集団をコントロールできないと感じます。実習を見に行った時に、実習で全体の前に立ってはいるけど、結局一対一になっていると感じました。周りの子はぼけーっとしていることが多い。そういう集団をコントロールする力というものについて、集団とは何ぞやとか、集団をコントロールするにはどういうことが必要かみたいなことを、みんなで実践しながら覚えていくことが必要だと思っています。小学校の先生でも中学校の先生でも、ある程度はそういった集団訓練あるいは集団統率、それができないとやっていけないだろうなと思います。

あともう一つは、やっぱり大人の中で揉ませたい。大学という所は、同年代の学生、あるいは学生と先生というシンプルな関係性しかない。それによって効率よく大量に物を教えるシステムが成り立っているわけですが、そこに斜めの関係はない。そういう中では、学生に甘えが出てくるし、社会人とか、教員としての資質の部分が育ちにくいと思います。だからこそ、大人の中に放り込まれ、揉まれることが必要なんだろうなと思います。

１－６　その他

司：実は、昨日娘から医者とか教師に一番大切なものは何か、一言でいってと問われ、直観力って答えました。直観力っていうのは、勘とかあてずっぽうじゃなくて、一瞬にして洞察する力。それまでの経験や知識、そういったものを総合して、こうだ！って瞬時に判断する力であって、その場ではうまく説明できないけど後できちんと説明できる、そういう力が大切なんだと思います。だからといって、実際に学

校現場で揉まれないと力が付かないとなると、大学での教員養成教育そのものの意味を無くしてしまいます。教員養成の段階で何ができるかを考えると、やっぱり人に対する興味関心なんだろうと。なぜそう考えるの？どうしてそういう行動をするの？それが人の気持ちが分かるということであり、それは子どもの行動に対しても感じなきゃいけないし、友達に対してもそう。大人に対してもそうだし、あるいは障害を持っている人に対しても、なぜそうなの？なぜそう考えるの？という風に。ただ気の毒というのでなく、相手がどう辛いと感じているのかを具体的に考えられる力をつけていく必要があると思うんです。それがあれば、実際に子供がいなくても、あるいは教師や保護者がいなくても、ある程度対応の仕方とか考え方とかができると思います。その上で実際に人と会って、そこで修正を加えていけば、より短期に高度な見取り力を身に付けられるんじゃないかと思っています。そのためのカリキュラムを何とか工夫できないか、授業を作れないかなと思っています。私の一方的な思いなので、それが良いのかどうか、あるいは修正されるべきなのか、あるいはこういうやり方があるんだよっていうことがあれば、ご意見を伺いたいと思います。

Ｂ：その授業科目の流れの中で、今やっている内容を整理し、それを構造化していく。みんながそれを文字に起こして、図的に見ていく必要があると思います。今年来たばかりで、そういったものが図式として入ってないのですが、だんだん見えてくるにしたがって、あっこれは同じ気持ちだなと意を強くした部分があります。やっぱり、養成教育の戦略を整理し、考える必要があると思います。

　授業の具体的な内容は、それぞれ担当している先生にしか見えないところがあるじゃないですか。それはそれでいいのかもしれないけども、養成教育の大きなベクトルで考えて行くとき、じゃ、その中の細かい要素はどうあればいいのか。この科目だったらここを中心のベクトルにしようとか、そういった先生方がやろうとしている意味が、より明確なメッセージとして学生に伝わると良いと思います。

司：おっしゃる通りで、それは教員間にも当てはまると思います。小学校教育コースの場合は、設計の段階から携わっている人間が今も半分います。そうした者にとっては当然のことなんですが、それを後から来られた先生方にちゃんと伝えられるようにして来たかというとそれは全然なくて、反省しています。

Ｂ：アイディアとかそういうものの整理。あまりにきめ細かな分析まで行っちゃうとアイディアと呼ばれにくいかもしれないので、アバウトな整理をして、そこでいろいろ意見を出し合うと、中から見えてくるものがあるのでは。結構でかいものが見えてくるんじゃないかなと思うんですけど。

司：予定の時間を過ぎてしまいました。みなさん、ありがとうございました。

２．考察

教職大学院をはじめとして、教員養成における実務家教員への期待と役割は以前に増して大きくなっている。本学教育学部でも、実務家教員が果たす養成教育への貢献は多大であるが、一方で学校現場でどのような教員が求められ、そのためにどのような養成教育がなされるべきか等については十分に語られて来なかったように思う。学校現場の実情を熟知した実務家教員の感想や意見は、今後の教員養成教員に欠かせない示唆を含んだものであり、真摯に取り組むことが求められる。

これに対し、本提言では、まず養成教育における実務家教員と研究者教員のバランスやチームワークを取り上げた。小学校教育コースを例に、その成果の要因として、教育に対するポリシーが明確でリーダーを中心に教員がこれを共有していること、またポリシーに沿ったカリキュラムが構成され、研究者教員と実務家教員がそれぞれの特徴を生かし協働できていることがあげられた。さらに効果を上げるためには、学部４年間を俯瞰した学びの道筋が学生の側にも共有されること、そしてそれを記録として残していく努力が求められる。その際、実践と省察、そして指導教員による評価が重要であり、教員になりたいという思いを４年間持続できる工夫や配慮が必要である。

学校教員に求められる力としては、読み取る力（評価する力）があげられた。単なる評定のための評価でなく、子どもそして教員自身が成長するための評価で、その目的や視点、何を学び指導するのかを明確にし、そのための記録をとって次の活動や学びに還元することが意識されなければならない。こうした学びや実践が、教員としての力量形成、特に子どもを見取る力に結びつくと考えられる。こうした内容は、教員になってから学ぶものが多いのも事実だが、養成段階で何をどこまで取り組むのか、方法も含め今後の課題といえる。

また、学生に不足しているものとして、集団をコントロールする力や多様な人間関係の中での学びがあげられた。いずれも対人関係能力に関わるが、前者は、教員として学級全体を相手にすることができず、教育実習等において結局一対一の関係になってしまうとの指摘である。教師の職能として教室内の集団をどう統率し機能を高めていくか、意識面も含め、実習までにある程度のことはできるようになっておく必要があろう。後者は、大学という同質性の高い集団以外で学生が学ぶ意義を訴えるもので、多様な価値観に触れるとともに社会人としての責任や自覚を促すものである。今日の学校教員が置かれた状況を踏まえた、切実な要望ともいえる。

実務家教員の意見は、学校現場に留まらず、保護者や地域、教育行政の視点も含んでおり、教員養成として何ができており、何が足りないのか、そして今後どう改善していくべきなのかを示す一つの指針でもある。定期的に意見交換し、教員養成教育の改善を図っていくことが大切と考える。

おわりに

学校現場やそれを取り巻く地域の実情等をよく知る実務家教員から、小学校教育コースあるいは教育学部に対する率直な印象や考えを述べてもらった。近年、教育においてもアカウンタビリティーが強く問われる傾向であるが、教育学部の中と外、両方の視点を有する実務家教員に聞くことで、いかに多くの所でそれが不十分であったかを思い知らされた気がする。今回の提言を参考に、教員養成教育の改善を図って行くことが大切だろう。

なお、本研究は科学研究費（課題番号：23501149）の補助を受けて実施した。

参考文献

中央教育審議会（2006）：「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」
文部科学省HP：「教職大学院における「実務家教員」の在り方について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337032.htm